

1. 略歴

- 1987年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1989年4月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）進学
1991年3月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学
1995年10月 ドイツ学術交流会（DAAD）給費奨学生として、ドイツ連邦共和国フライブルク大学（Albert-Ludwigs-Universität Freiburg）に留学（～1997年9月）
1998年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程単位取得退学
1998年11月 日本学術振興会特別研究員（～2001年10月）
2000年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程修了
博士（文学）学位取得
2002年1月 山口大学工学部 助教授
2005年4月 山口大学人文学部 助教授
2007年4月 山口大学人文学部 准教授
2011年4月 東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2018年4月 東京大学大学院総合文化研究科 教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 主要業績

(1) 博士論文

「ハイデガー哲学における「言語」の問題——志向性と公共性の連関 およびその詩的変様について」、東京大学、2000年

(2) 単著

『ハイデガーの言語哲学——志向性と公共性の連関——』、岩波書店、2002年5月、全264頁

(3) 共著

『よくわかる哲学・思想』（納富信留・檜垣立哉・柏端達也編）、ミネルヴァ書房、2019年4月（「20 キルケゴール」70-71頁、「1 ニーチェ」（76-77頁）、「5 フッサール」 「6 解釈学」 「7 ハイデガー」（84-89頁）を分担執筆）

『続・ハイデガー読本』（秋富克哉・安部浩・古莊真敬・森一郎共編著）、法政大学出版局、2016年5月（全406頁を編集の他、「34 和辻哲郎、九鬼周造」（321-328頁）を分担執筆）

『ハイデガー読本』（秋富克哉・安部浩・古莊真敬・森一郎共編著）、法政大学出版局、2014年11月（全406頁を編集の他、「序奏 神学という由来」（4-6頁）、「7 内存在・気遣い・真理『存在と時間』Ⅲ」（68-78頁）を分担執筆）。

『子どもの難問』（野矢茂樹編）、中央公論新社、2013年11月（「どうすればいいかの人とわかりあえるんだろう？」（84-86頁）、「芸術ってなんのためにあるの？」（148-150頁）を分担執筆）

『自己』（叢書「哲学への誘いがない——新しい形を求めて——」第Ⅴ巻、松永澄夫・浅田淳一編）、東信堂、2010年11月（「呼びかけられる私、呼びかける私——「自己」の由来と行方について——」（170-206頁）を分担執筆）

『文化と政治の翻訳学——異文化研究と翻訳の可能性——』（山本真弓編）、明石書店、2010年5月（「翻訳—あるいは虚無を通じた「私たち」の変容」（218-240頁）を分担執筆）

『ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉——』（ハイデッガー研究会編）、理想社、2006年9月（Ⅲ章「共同体と倫理」所収の論考「共同体という底無し没根拠——「別の始元への移行」の倫理的含意——」（139-158頁）を執筆）

(4) 学術論文

「「祈り」について——聖書とW・ジェイムズを手がかりに——」、『立命館大学人文科学研究紀要』No.120、2019年12月、30-60頁

- 「「エレメント」を問うとは、どういうことか——松永澄夫著『経験のエレメント』をめぐって——」、『経験の構造』(哲学会編、哲学雑誌、第133巻第806号)、有斐閣、2019年10月、19-38頁
- 「生ける世界内存在の運動としての気遣い」、『現代思想 総特集＝ハイデガー』(2018年2月臨時増刊号)、青土社、2018年1月、95-110頁
- 「運命を生きること——九鬼周造の運命論にかんする一考察——」、『現代思想 総特集＝九鬼周造』(2017年1月臨時増刊号)、青土社、2016年12月、106-117頁
- 「感情と言語 ハイデガーとアンリのあいだで」、日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ研究』Vol.6、2016年、47-71頁
- 「生きてあることにとって真であること」、『真理の再生』(哲学会編、哲学雑誌、第129巻第801号)、有斐閣、2014年10月、68-84頁
- 「言語・存在・自己への問い——あるいは死すべき各自性の共同生起について——」、西日本哲学会編『西日本哲学年報』第21号、2013年10月、137-154頁
- “Being Aware of One’s Own Life”, *Proceedings of the 6th BESETO Conference of Philosophy*, 2012.1, pp.253-260
- 「形而上学の根源をめぐって——ハイデガーのプラトン解釈の一側面——」、『理想』第686号、理想社、125-137頁
- 「もののあはれ」と「自己触発」、『日本語の哲学』(哲学会編、哲学雑誌、第123巻第795号)、有斐閣、2008年9月、108-124頁
- 「翻訳」について——或いは諸言語の社会性の間隙に生成するものについての試論——、山口大学人文学部異文化交流施設編『異文化研究』vol.2、2008年3月、144-152頁
- 「共同体の没根拠と存在の変容——ハイデガーの共同体論の帰趨——」、哲学若手研究者フォーラム編『哲学の探求』第34号、2007年6月、7-20頁
- 「原因」と「理由」の彼岸への問い——ハイデガーの哲学的企図の再吟味——、ハイデガー・フォーラム編電子ジャーナル *Heidegger-Forum*, vol.1、2007年4月、6-21頁
- 「生の物語的な救済について」、『なぜ人々は物語なしに生きていけないのか——多メディアの中の物語の発生・展開・終焉——』(平成16-18年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、課題番号16602015、代表者:成城大学・北山研二教授)、2007年3月、36-46頁
- 「美」の人称性について——美しいのは誰にとってか——、『実存と政治』(実存思想協会編、実存思想論集XXI)、理想社、2006年6月、117-135頁
- 「時の過ぎ去り——人称的世界の時間的構造の探究のための準備的考察——」、『山口大学哲学研究』第13巻、2006年3月、23-36頁
- 「理由の空間」と哲学の問い」、日本現象学会編『現象学年報』第20号、2004年11月、53-65頁
- 「人間と動物の差異をめぐるハイデガー的思考の再検討」、西日本哲学会編『西日本哲学年報』、第11号、2003年10月、79-92頁
- 「「言明」の成立基盤に関するハイデガーの理論と「世界」の公共性」、日本哲学会編『哲学』No.53、法政大学出版社、2002年4月、217-226頁
- 「分裂の生起と自己の再生——ハイデガーの自由論の次元へのアプローチ——」、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』20、2002年3月、81-93頁
- 「行為の始まりと終わり——自由の非所有に関する試論——」、『はじまり』(哲学会編、哲学雑誌、第116巻第788号)、有斐閣、2001年10月、95-114頁
- 「変動する真理と現実性の概念——ハイデガーの問いが目指したもの——」、『悪』(実存思想協会編、実存思想論集、XIV)、理想社、1999年8月、187-204頁
- 「語られたものの現前と非現前——ハイデガーの言語論の一側面——」、『ギリシア・中世哲学研究の現在』(哲学会編、哲学雑誌、第113巻第785号)、有斐閣、1998年10月、201-217頁
- 「見えるようにすること」と“制作すること”——ハイデガーの言語論解釈のための準備的考察——、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』16、1998年3月、1-14頁
- » Zu Heideggers Methode der hermeneutischen Phänomenologie «、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』15、1997年3月、1-12頁
- 「ハイデガーの『存在と時間』における“言葉”の問題」、東京大学文学部哲学研究室『論集』13、1995年3月、73-83頁
- 「変様する世界と現存在の自己了解——ハイデガー『存在と時間』における変様概念の考察——」、東京大学文学部哲学研究室『論集』12、1994年3月、188-199頁

(5) 翻訳

- H. ドレイファス著「テクノロジーへの自由な関係の獲得に関するハイデガーの思想」、『思想』7月号、岩波書店、2001年7月、190-206頁
ヴァルター・シュヴァイドラー著「積極的自由とは何か」、『理想』No.663、理想社、1999年7月、142-158頁

(6) 書評

- 「[書評] 串田純一著『ハイデガーと生き物の問題』、『ウィトゲンシュタインと実存思想』(実存思想協会編、実存思想論集、XXXIV)、知泉書館、2019年6月、189-192頁
「[書評] 茂牧人著『ハイデガーと神学』、『生命技術と身体』(実存思想協会編、実存思想論集、XXVII)、理想社、2012年6月、185-188頁
「自己であることの痛み そして希望——池田喬著『ハイデガー 存在と行為——『存在と時間』の解釈と展開』の喚起する問いについて——」、『創文』(2012春No.5)、創文社、2012年4月、20-24頁
「[書評] H・H・ガンダー編、川原栄峰監訳『ハイデガーとニーチェ』、『悪』(実存思想協会編、実存思想論集、XIV)、理想社、1999年8月、228-232頁

(7) コラム等

- 「書評「想像へと誘う発見の書」(佐藤光著『柳宗悦とウィリアム・ブレイク環流する「肯定の思想」』(東京大学出版会、2015年2月刊))」、『東京大学教養学部報』576号、2015年7月1日
「回帰する問いのアクチュアリティ」、『東京大学教養学部報』549号、2012年7月4日
「時をこえ共に味わう心の糧」(「子どもの難問——哲学者の先生、答えてください!」第17回「芸術ってなんのためにあるの?」)、『Dream Navi』、四谷大塚、2012年11月
「わかちあえない自分から青空の下へと抜ける道」(「子どもの難問——哲学者の先生、答えてください!」、第9回「どうすればほかの人とわかりあえるんだろう?」)、『DreamNavi』、四谷大塚、2012年3月
「(時に沿って) はじまり、はじまり」、『東京大学教養学部報』542号、2011年11月2日
「ハイデッガー研究の新生のために——翻訳革命によって「希望の哲学」を展望した学究——(渡邊二郎著『ハイデッガーの「第二の主著」『哲学への寄与試論集』研究覚え書き——その言語的表現の基本理解のために——』理想社、2008年に寄せて)」、『図書新聞』第2886号第6面、2008年9月20日

(8) 口頭発表(主なもの)

- 「[祈り]について——生の意味の変容をめぐる試論——」、間文化現象学ワークショップ「間文化性と宗教」(立命館大学間文化現象学研究センター、科学研究費基盤研究(B)「間文化性の理論的・実践的研究——間文化現象学の新展開——」主催)、立命館大学、2019年3月17日
「[エレメント]を問うとは、どういうことか? 松永澄夫著『経験のエレメント』をめぐる」、哲学会・第57回研究発表大会シンポジウム「経験の構造——松永哲学を巡って——」、東京大学、2018年11月4日
“On Modification of Life Awareness”, Conference Nature Time and Responsibility 3, Münchner Kompetenzzentrum Ethik (Munich Center for Ethics), Ludwig-Maximilians-Universität, Munich, June 16th, 2018
「感情と言語——ハイデガーとアンリのあいだで。基礎的考察の試み——」、日本アンリ学会・第7回研究大会、学習院大学、2015年6月13日
「各自性の経験と思惟の超越について」、実存思想協会・春の研究会(日本ホワイトヘッド・プロセス学会との合同シンポジウム)、明治大学、2014年3月24日
“On the Notion of “Permanence of Human Life” in Jonas’ Ethics”, 科学研究費補助金「グローバル化時代における現代思想——概念マップの再構築——」(代表: 中島隆博・東京大学教授) 第8回研究会、ハワイ大学、2013年2月8日
「言語・存在・自己への問い——あるいは死すべき各自性の共同生起について——」、西日本哲学会・第63回大会シンポジウム提題、南山大学、2012年12月1日
「ハイデガーとスピノザ」、「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」(科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号22320007) 第8回研究会、大阪大学、2012年5月20日
“Being Aware of One’s Own Life”, The 6th BESETO Conference of Philosophy、東京大学、2012年1月8日
「ひとりあること/共にあること——和辻とハイデガーをめぐる試論——」、哲学会・第50回研究発表大会、ワークショップ、東京大学、2011年12月3日
「実存と時間」、哲学会・第47回研究発表大会、東京大学、2009年10月31日
「物語的な生の救済について」、「なぜ人々は物語なしに生きていけないのか——多メディアの中の物語の発生・展開・終焉——」(科学研究費基盤研究(C)課題番号16602015) 研究会・招待講演、成城大学、2006年12月14日

- 「菊地恵善氏「ニーチェの永遠回帰思想について」への質問」、西日本哲学会・第57回大会シンポジウム・特定質問、佐賀大学、2006年12月3日
- 「原因」と「理由」の彼岸への問い」、ハイデガー・フォーラム第1回大会、東京大学本郷キャンパス、2006年9月16日
- 「共同体の没根拠と存在の変容——ハイデガーの共同体論の帰趨——」、哲学若手研究者フォーラム・テーマレクチャー「大陸系」哲学の現在」、国立オリンピック記念青少年総合センター、2006年7月22日
- 「〈今〉とは何か」、「時間とは何か？ 人文科学からのアプローチ」、山口大学時間学研究所連続レクチャー総括シンポジウム、山口情報芸術センター、2005年6月4日
- 「美の人称性について」、第13回実存思想協会・ドイツ観念論研究会共催シンポジウム（テーマ：「芸術美のアクチュアリティ」）、京都工芸繊維大学、2004年6月27日
- 「Ratioの空間」と哲学の問い」、日本現象学会・シンポジウム（テーマ：「ハイデガー研究の現在」）、山形大学、2003年11月9日
- 「言語という〈始源〉の生成」、Forum für Geisteswissenschaften Nagoya、南山大学、2002年12月21日
- 「人間と動物の差異をめぐるハイデガー的思考の検討」、西日本哲学会・第53回大会、熊本県立大学、2002年12月7日
- 「分裂の生起と自己の再生——ハイデガーの自由論の次元へのアプローチ——」、実存思想協会・研究発表会、法政大学、2001年10月13日
- 「〈言明〉の成立基盤に関するハイデガーの理論と〈世界〉の公共性」、日本哲学会・第60回大会、学習院大学、2001年5月27日
- 「言語と共同体——ハイデガー哲学の可能性——」、哲学会・第38回研究発表大会、東京大学、1999年11月7日
- 「変動する真理と現実性の概念——ハイデガーの問いが目指したもの——」、第7回実存思想協会・ドイツ観念論研究会共催シンポジウム、京都大学会館、1998年9月15日
- 「ハイデガー哲学における“言葉”の問題」、実存思想協会・第20回研究発表会、専修大学、1994年3月26日

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

- 東京大学文学部ティーチング・アシスタント（1993年4月～1995年7月）
- 東京理科大学（1998年4月～2002年3月）
- 成城大学文芸学部（2000年4月～2002年3月）
- 大阪大学人間科学研究科・人間科学部（2004年9月集中講義）
- 九州大学文学部・大学院人文科学研究院（2007年9月集中講義）
- 東北大学大学院文学研究科（2014年12月集中講義）

(2) 学会

- 哲学会：理事（2011年度～現在）
- 日本哲学会：編集委員（2011～2014年度、2019年度～現在）、評議員・理事（2017～2018年度）、林基金運営委員（2017～2018年度）
- 日本現象学会
- 実存思想協会：副幹事長（2011～2013年度）、理事（2013年度～現在）、編集委員（2019年度～現在）
- 西日本哲学会：理事（2005～2014年度）、編集委員（2010～2013年度）
- ハイデガー・フォーラム：実行委員（2006年度～現在）、事務局代表（2017年度～現在）